



——「中島青磁」についてもう少し聞きたいのですが、「中島青磁」を本当にやっていこうと決意されたのはいつのことですか？

その当時、中国陶磁の大家として有名だったのが小山富士夫先生でした。「ようし、この先生に会わないと話にならない」と今思えば無謀な決意をして鎌倉まで出かけました。

けてできた土を大事に使わないと罪を重ねている気がします。

元々、僕は「へそまがり」だったので、優秀だった兄貴が辰砂を始め日展に出品したので、じゃ僕は青磁で日本伝統工芸展に出品するといった具合でした。人と同じことをするのが嫌いで、人がやっていないことをやるうという気持ちが強かったですね。だから「中島青磁」と言われるものができたんだと思います。

先生の家をやつと探り当たったのですが、門の前に立つと照れくさくなつて中に入れなかつたですね（笑）。

12月の終わりだったので、みぞれ交じりの雪が降っていて、両手には作品を下げていましたので、手がかじかんでしまいました。そうするうちに、若い奥さんが気づかれて、中に招き入れてくださいました。「寒いでしょうから」と入れていただいたコタツの温もりがうれしくて、今でも忘れられない思い出です。

先生に作品を見ていただき、「いい色をしているね」「形はもう少し工夫しなきゃ」と言ってもらいました。

小山先生といえば雲の上の人だったので、青磁のことや見るべき作品などを本当に親切に教えていただき、飛ぶようにして家に帰りました。その後はこの小山先生を美の基準として、一心不乱に青磁に取り組みました。

先生にはその後も公私にわたつてお世話になりましたが、人にはやはり人生の師となる存在が必要ですね。

——小山先生という師を得られてからも「偶然を必然に」する闘いを？

ずーっと、そうです。美とは、失敗するかしないかのギリギリのところにあると思うんです。

セオリーから外れたことをすると違ったものが出来上がる。その中から偶然に美しい色を発見する、何故そういうものができたか調べないといけない。調べるには化学を知らないといけないので、化学式を全部おぼえ、そうしていろんなものを作ってみました。そうやってやきものには色、光

沢、色の深さなど無限のバリエーションがあることを知ったんです。

ところが、今の学校や陶芸教室では失敗しない方法しか教えられないので、おもしろいものが出てこないような気がします。

——ところで、過日、名護屋城博物館で開催されました「武雄の現代の陶芸家たちⅧ」を見る機会がありました。そこに出品されていた先生の「青瓷釉彩壺」に驚きを感じました。

今までにはない色彩豊かな青磁でしたが、どんな想いが込められているのですか？

私にはブルーや緑だけでなく、木々の色や花の色も青磁に見えます。自然の中には色んな色があるので、それらの色を表現してみたかったんです。ある専門家からは「これは青磁じゃない」といわれましたが、自然の全ての色が青磁に見えるので、その人に「私は色盲かもしれないね」と言ったら啞然としておられました。

した（笑）。

しかし、青磁だけをやっていたらダメなんで、若い人には色んなことをやるように言っています。僕も若い時には、土物の唐津もやっただし、天目も作りました。対称的なものをやれば、より深く理解することができると。又、そうやって自分の中にある才能に気づくんじゃありませんか。天才とは、その人だけにしかない才能だと思えます。そうしないと人は生きていけないから、神様が誰にでも与えてくれたものだと思います。



例えば、小さい子どもにリングを描かせると、一人として同じリングを描かないですよね。小さい子が実におもしろい絵を描くんです。ところが、大きくなって描いてみると色んな知識が豊富になって上手く描けるんですが、同じ絵になってしまう。知識が邪魔してしまっただけですね。

——今年の正月に放送された「佐賀のがばいばあちゃん」のTV口ケを自然豊かな武雄市に誘致したんです。先生も口ケがあつたところでお育ちになられたんですよね？

あのドラマはよかったね。そうそう、ドラマに出てたあのピンピン橋を境に向かうの子どもとケンカをやっていましたよ。

あのテレビを見た人がうちに来て、「あのドラマにあった時代の風俗や生活は演出のやり過ぎじゃないですか？」と言ったんで、そこで私は「とんでもない、昔はもっとひどかった！」と思わず言ってしまうし

た(笑)。

家もほとんどが藁葺きで、裸足で遊んでいましたからね。ごはんは麦がほとんどで、米が少し入っているくらい。

でも、いじめはなかった。みんなが貧しくて同じだったから、助け合っていたよね。自然を謳歌していた。そういう所で育ったおかげで、こういう作品が生まれただんだと思います。

——現在武雄市には先生の他にも作家として活躍されている方が多数いらっしゃいますし、武雄古唐津焼、多々良焼そして有田焼の窯元など約90軒があるんですが、武雄の陶芸シーンがもっと盛り上がってほしいと願っています。どうしたらいいんでしょうか？

海外からたくさんさんのやきものが入ってくるし、国内でも安い商品がどんどん作られています。しかし、人はだんだんと質のいいものを求めてきていると思うので、いいもので勝負をしていかないといけない。そう

いう淘汰がされてくると思います。

ある講演会で、「いいものとは何ですか？」と唐突に聞かれて僕も困ったことがあつた(笑)。いいものとは「残る」ものだと言えらんじやないですか。人でも作品でも、残るか残らないかでしよう。

素材に付加価値を与えることが工芸家の仕事。割り箸をキレイに磨いて、漆をかければ残るでしょう。やさきものは土の付加価値を上げることで残っていきます。

——話は変わりますが、先生のお宅には何回かお邪魔しました。このお庭はいいですよ。私も日本全国の有名な庭を踏破しましたが、このようなお庭はどこにもないですよ。

いやあ、実はうちの庭師さんにはできるだけ枝を切ってくれなると言っているんです。自然に近い形が一番いいです。作陶も同じですよ。

以前女優の檀ふみさんと対談したときに「青磁を音

楽にたとえると…」と聞かれました。「バツハの曲」と答えました。作陶している時によくクラシックの曲を聞いているんですが、バツハの曲には自然の流れを感じます。バツハは宗教音楽を作っていたわけですが、彼は個性を没して作っていた。

ところが他の作家は自我が強いので、曲に作為が感じられるんです。

僕も今後は、自然に近いものを、自然への祈りを込めて作っていかれると思っています。そのためには個性を没して、個性を超えた時に作品が完成できるのではと考えています。

——実は、人間国宝の認定がお決まりになった時に、お祝いを申しあげたんですが、その時に先生は「いや、まだまだこれからですよ」とおっしゃったのは、そういうことだったんですね。

本日は貴重なお話をお聞きすることができました。本当にありがとうございます。今後も武雄のためにも、ご活躍をお祈りしています。ありがとうございます。

(この記事は福博印刷(株)のご協力により作成いたしました。この記事はHPにも掲載されています。

<http://www.umakato.jp/>

